

## カワバタモロコと小川の自然

山田 辰美

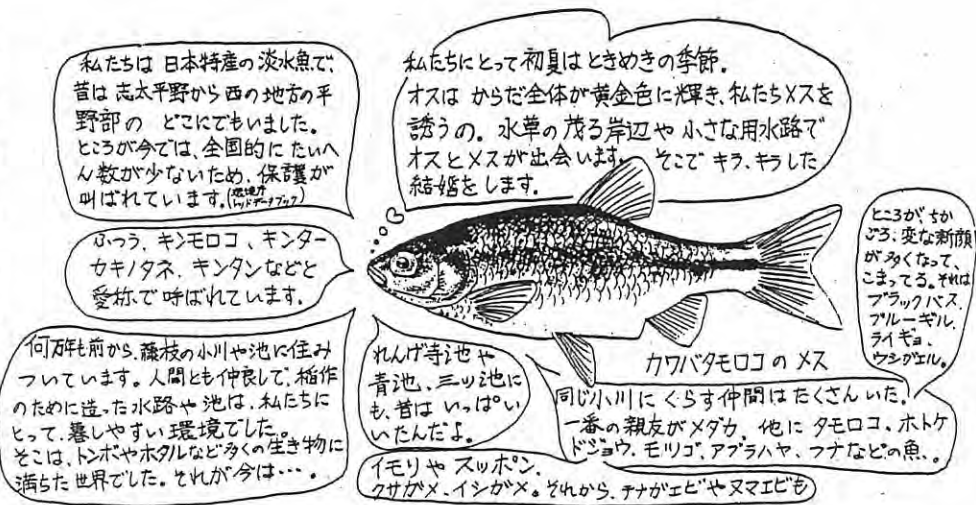
かつて、メダカやモロコなどの栖む小川は、私たちにとって最も身近な自然のひとつであった。幼い私たちにたくさんの遊びを与え、不思議に満ちていた水辺は、自然の興味をかきたててくれた。また、遠くで異郷で暮らす者にとって、理屈抜きに懐かしく心なぐさめられるのがふるさとの山河である。しかし、慣れ親しんだ多くの水辺はコンクリートで固められた無機質な表情に変わり、汚水の泡立つ排水路と化している。季節はめぐっても、ホタルも飛ばす、メダカやモロコの群れ泳ぐ姿も見えない。

ところが、自然環境のこの変容に気付いている人は以外に少ない。あるいは、身近な日常的景観の中から自然性の失われていくことを、多くの人が黙殺しているのだろうか。私たちが暮らしの利便性や豊かさを求めるために、懐かしい景色や生き物を失うことになるのは止むを得ないとする考えもある。この愚かな人間の思い上がりを克服しなくてはいけない。都市化や開発の中にあっても、地域固有の(つまり、ふるさとの)自然や生き物を次代の子供たちのためにも守り残したいものだ。多くの人の英智を結集すれば可能であるはずだ。私たちはそれ程貧しくはないはずだ。

さて、カワバタモロコについて紹介しよう。藤枝市葉梨地区の小流藪田川に生息する体長五センチ足らずのこの魚は、日本特産種で県内外で絶滅の危機に瀕している。30年ほど昔には、志太平野の至る所で見られ、初夏の繁殖期にオスが鮮やかな黄金色を呈することから、キンモロコやキンターと、またその形態からカキノタネなどの愛称で呼ばれていた。

藤枝市のカワバタモロコが注目されるようになったのは、全国的に生息地が少ないことに加えて、この魚の分布東限地が藤枝であることが確認されたためである。中国大陸から西日本に入って来たと考えられるコイ科魚類を主とする日本の淡水魚類の多くが、数千年の昔、ゆっくりと分布を東日本まで広げてきた。しかし、この魚は地質的に不安定な地帯(フォッサマグナ)を越えることができず、安定した低湿地の広がる志太平野にとどまり繁殖したようだ。大地の歴史の証言者でもあるのだ。

環境庁が昨年まとめたレッドデータブックに、絶滅の危惧される魚としてその名を挙げられるまでになったが、知名度はメダカに遠く及ばない。実は、カワバ



タモロコとメダカとは好む生息環境が似ていて、いっしょに採集されることが多い。ところで、東高の生物部の先輩たちが淡水魚に付く寄生中を研究し、鈴木梅太郎賞など高い評価を得ている。その資料によれば、昭和40年頃は藤枝市内の至るところでメダカが採集されているのだ。さらに、聞き取り調査の結果を加えると、かつては蓮華寺池、青池、二ツ池やそれらとつながる小流のどこにでも、カワバタモロコとメダカがウジャウジャいたようである。それが今は、メダカですら藪田川に行かないと見られない。

さて、環境問題がマスコミを賑わし、自然ブームの昨今だが、気になる面がある。県内でも、富士涌水の柿田川やトンボの桶ヶ谷沼など、話題を呼び衆目を集めている。しかし、その多くの人の意識に、パンダやコアラを見に行く発想と似たものを感じることもある。珍獣奇獣あるいは怪し気な見世物に集まる心理。付和雷同とまで言わないまでも物見遊山の感覚。ファッションやブームでしかない自然保護は定着しないだろう。自然や環境の問題は、私たちの生き方、暮らし方に関わることなのである。

私たちは深山幽谷に潜む珍獣の保護を呼びかけているのではなく、単に学問的に貴重な魚を守れというのでもない。その魚を育くむ豊かな小川の自然を残したいと切望している。生き物の豊かな水辺は、私たちの生活環境を潤いのあるものとするふるさとの山河の、その中核となるだろう。子供たちのために回帰すべきふるさとを再生したいのだ。むしばまれて、虫の息となっている足元の自然に目をやり、魅力に満ちた小さな隣人の存在に一人でも多くの方が気づくことを願ってやまない。

(第44回卒 常葉学園短大講師)